



Title	坂口安吾の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山路, 敦史
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13412号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/74446">http://hdl.handle.net/2115/74446</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Atsushi_Yamaji_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 山 路 敦 史

## 学位論文題名

### 坂 口 安 吾 の 研 究

#### ・本論文の観点と方法

本論文は、坂口安吾を評論のみならず小説においても批評性を大きく取り入れたテクストを書いた作家として認め、さらに安吾の作品をその批評性が自らを絶対化・権威化することを相対化する性質を併せ持つテクストとして再評価することを主要な観点とするものである。

そのことを明らかにするために、本論文は専ら「周章て者」「退屈」「ふるさと」という言葉を安吾の文学に固有の契機として着目し、また日本近代文学史において特定の意味を与えられてきた場所である「武蔵野」を、安吾が虚構的に更新して批評の舞台としたことを明確にする。本論文はこれらの着眼点を生かし、安吾の文学総体の様式を従来に通説とは異なる独自の構想の下に再構成することを試みている。

本論文の方法は、安吾のテクストの自己言及性に着目しつつ、その可能性を論者自身の読解によって最大限に引き出すテクスト解釈を基礎とする。これまで「ファルス」(farce)としての評価に覆われて焦点化されなかった安吾の作品群の重要な特徴を、それらの諸契機に即して根底的に分析し直し、そこにおける批評性と再帰的な自己批評性のあり方を検証する。また「ふるさと」というキーワードに収斂するように読まれてきた諸作品についても、「ふるさと」概念自体に内在する批評性に留意するとともに、「ふるさと」と「武蔵野」との関わりについても論及する。幾つかのミステリについても同様の方向性に従って再検証を試み、さらに天皇制論議に代表される時局的な要素との関わりについても論じている。

#### ・本論文の内容

序論では、従来の安吾研究を概観し、安吾の批評性を問い直す視点の必要性を示した。1においては、これまでの安吾の評価を「無頼派」に寄せられた評価から再検討した。2においては、安吾が小林秀雄を「教祖」として批判した「教祖の文学」を取り上げ、小林のテクストへの安吾の対応の仕方を検証し、安吾自身が「教祖」化されることへの警鐘を鳴らした色川武大の安吾論「眼の性のよさ」も取り上げ、安吾文学に対する批判的な観点の基礎を構築した。3においては、安吾を再検討するための視座として、概念化への希求を戯画化した「周章て者」の形象や概念化を拒む「退屈」の評価が重要であることを示し、「ふるさと」というキーワードで安吾が概括されていることを問題視した。またその観点から「文学のふるさと」以前の「ふるさと」概念に遡って検討し、「文学のふるさと」そのものの再読を試み、〈故郷〉を再検討する視点を提示した。さらに、起源を語るその方法が安吾の批評性を担保していることを挙げ、それを検討する視点を示した。

第一部では、これまで本格的に検討されることのなかった重要な形象・形容として「周章て者」と「退屈」を取り上げ、安吾初期のテクストを分析した。第一章では、「木枯の酒倉から」について、国木田独歩「武蔵野」を嚆矢とする「武蔵野」イメージの歴史との関連を背景として、「周章て者」が語る「武蔵野」の位相に注目し、〈武蔵野の文学〉として位置づけた。第二章では、「風博士」の語り手「僕」が語る内容と「風博士の遺書」の書かれた内容の矛盾を「僕」が無視していることに

着目し、「風博士は自殺した」という結論に向かおうとする「僕」を「周章て者」としてとらえた。第三章では、「村のひと騒ぎ」における語り手「私」が現実を無視する態度や、「物語」と現実との不一致に悩む姿勢を同時代の農民文学論争の問題系との関わりにおいて把握した。第四章では、長編小説『吹雪物語』に寄せられた「退屈」という否定的評価を、むしろ同時代思想への逆説的な抵抗概念としてとらえ直し、当時のベストセラーである石川達三『結婚の生態』に寄せられた評価との比較も行った。

第二部では、「周章て者」や「退屈」の表象が、思想的抵抗としてあったとする第一部での論述を踏まえ、安吾の文学を概括する「ふるさと」の概念を再検討した。また「ふるさと」と区別されてきた「故郷」の表象について、「武蔵野」の視点を取り入れることで再評価した。第五章では、「ふるさとに寄する讃歌」を「ふるさと」という主題への統合の志向とそこから逃れ去ろうとする拡散の志向の二面性を持つテキストとして読み直した。第六章では「帆影」と「海の霧」を取り上げ、統合する表象としての「ふるさと」の機能と、それへの抵抗となり得る「退屈」や液状化のイメージとの関係を改めて確認した。第七章では評論「文学のふるさと」を取り上げ、先行するテキストとして太宰治の「逆行」や『伊勢物語』第六段を参照し、そこに「退屈」や「周章て者」の介入の余地を認め、「ふるさと」という主題とは別の読みの方向性を示した。第八章では、小説「盗まれた手紙の話」などについて、「武蔵野」の観点が安吾のテキストの「故郷」表象をとらえ直す視点となることを示した。

第三部では、「武蔵野」の「故郷」との近接性を踏まえながら、安吾文学における「起源」を語る方法と批評性の構築との関連について、「起源」への様々な対応が認められる作品群を対象として分析した。第九章では、「風と光と二十の私と」において「武蔵野」と「故郷」との重なりを指摘し、「故郷」の魅力を突き放すような「ふるさと」を見出すことが小説家になるための条件とされていることを示し、その構造に逆説的な批評の契機を読み取った。第一〇章では、「桜の森の満開の下」についてしばしば指摘される独自性は、伝統的な桜のイメージを「これは嘘です」と一蹴してみせることによるところが大きいとする視点から出発し、語り手のしたたかな叙述方法を分析した。また結末に登場する「孤独」という語の扱いについて、従来のような「文学のふるさと」との対応ではなく、そこからの逸脱を指摘した。第十一章では、「不連続殺人事件」を中心とする安吾のミステリを取り上げ、制度や規範あるいは思考の固定化を批判した安吾が、完結性のあるゲームとして定義したミステリをどのようにとらえたのかを安吾のミステリ論の変容からたどった。また、探偵が存在しないミステリである「影のない犯人」の分析を契機として、文学／ミステリの境界を再定義した。第一二章では「肝臓先生」を論じ、肝臓先生についての詩を書く「私」が、その詩の「起源」として原爆を導入し、原爆詩として読めることを指摘し、そのことが肝臓先生の歴史的美談への批評となっていることを示した。第一三章では「保久呂天皇」を取り上げ、安吾が天皇の存在を天皇制というシステムのなかで改めて再考したことを示し、これまでの安吾の天皇および天皇制論の見方を拡充した。第一四章では「夜長姫と耳男」を論じ、当初は人物「ヒメ」への対抗手段としてあった仏像の制作が、評価の正反対な二体の仏像のどちらにおいても成し遂げられていないことを確認し、批判対象への反抗の身振りが、当の批判対象に賛美され、マニュアルとして説明されてしまうことを明らかにした。

結論「本論文の成果と課題」は、二節で構成される。1では、本論文で展開した議論を各部各論ごとにあらためてまとめ、その成果を確認した。2では、本論文の成果を踏まえつつ、それを踏まえた上で批評性のある安吾像をさらに再検討するための視点として、「ファルス」論の再検討が挙げた。また、本論文で分析できなかった安吾や他の作家の関連するテキストの存在を指摘し、その分析の必要性を自らの今後の課題として示した。